

立正大学博物館 第12回企画展

# 板碑

——立正大学の板碑研究——



立

正



立正大学博物館

## ご挨拶

立正大学博物館は、大学全体の学術的活動などを紹介する施設であるとともに、梵鐘をはじめとする仏教遺物の専門館でもある。その背景には、立正大学が長年にわたって仏教考古学を牽引してきた歴史があり、それにともなって収集された豊富な仏教考古遺物を立正大学博物館が収蔵しているという経緯がある。

今回は、収蔵品のうちから板碑を選り出して展示するが、実は板碑の展覧会は2度目である。前回は、第6回特別展として「題目板碑の世界」を開催したが、文字通り題目板碑に限定した展示であった。しかし、立正大学博物館が収蔵している板碑は、題目板碑だけではない。「題目板碑の世界」の観覧者からも、板碑コレクションの全貌を知りたいという希望があり、「題目板碑の世界」開催当時から題目板碑以外の板碑について紹介する企画が求められていた。

そうした希望を踏まえ、可能な限り立正大学博物館の板碑コレクションの全体像を伝えられるよう工夫を重ね、ようやく実現したのが今回の展覧会である。仏教系大学である立正大学にふさわしい板碑コレクションを堪能していただければ幸いである。

平成 29 年 10 月吉日

立正大学博物館長 時枝 務

## 目次

### ご挨拶／目次／凡例

1. 板碑とは	1
2. 板碑研究	4
3. 板碑名称論	5
4. 立正大学における板碑研究の展開	6
5. 立正大学博物館所蔵の板碑の紹介	11

### 参考文献一覧

## 凡例

- (1) 本図録は、第12回企画展展示図録として作成したものです。
- (2) 本図録は、時枝務館長の指示のもと、吉水美紗登専門職員が編集しました。  
本図録掲載の板碑拓本は池田奈緒子非常勤学芸員が担当しました。
- (3) 本図録掲載の板碑拓本の縮尺は基本的に1/10とし、一部1/6としました。
- (4) 板碑の写真・拓本に付した番号は本図録における作品番号です。

※ 2024年のWeb公開にあたり内容の一部を改訂しました。

### 【表紙の写真】

資料番号 1. 阿弥陀三尊板碑（当館所蔵）

### 【裏表紙の写真】

資料番号 1. 阿弥陀三尊板碑（当館所蔵）拡大

## 1. 板碑とは

### (1) 板碑の構造

板碑（板石塔婆）とは、中世に盛んに造立された石造の卒塔婆で全国的に分布している。

平安時代後期、貴族を中心に末法思想が広まり、浄土信仰が盛行した。それに伴い五輪塔や宝篋印塔などの石塔が造立されるようになり、板碑もこのような流れの中でつくられるようになったと考えられている。

一般的には、板状に加工した石材の頭部を山形に切り、その下に「二条線」と呼ばれる2本の溝を彫る。その下を枠線で囲み、上部に梵字や画像で仏を表す。梵字とは古代インドのサンسكريット文字で、梵字を用いて仏を表したものを「種子」という。種子の下には経文などの「偈」や「記念銘」、「供養者」または「造立者」の名前や「造立趣旨」などを刻む。また、「花瓶」や「三具足」などの仏具を刻むものもある。基部は板碑を地面に立たせるために柄をつくり、台石に組み込む。

板碑の大きさは様々だが、一般的には1m前後のものが多い。日本最大の板碑は埼玉県秩父郡長瀬町所在の応安2（1369）年銘の板碑で、高さ5.27m、幅1.2mである。鎌倉時代では大型の板碑が多いが、室町時代末では高さ30cmの板碑も造られるようになった。

形態は、在地の石材の性質によって異なり、板状や柱状、自然石を用いたものなど、地域によって異なる。

埼玉県を中心とした関東各地で多く見られる「武蔵型板碑」は、秩父長瀬周辺の荒川流域や比企郡小川町下里で産出する緑泥石片岩と呼ばれる青色で縦に剥離する石材を用いて造られている。

### (2) 板碑の年代

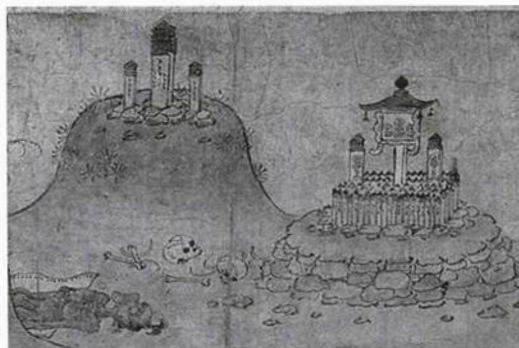
紀年銘のある最古の板碑は、埼玉県熊谷市須賀広地内で見つかった嘉禄3（1227）年銘の板碑で、阿弥陀三尊を陽刻している。その後、鎌倉時代後半にかけ増加し、南北朝時代に最も多く造られる。その後、室町時代に入ると減少し、近世初頭に姿を消す。

### (3) 板碑の起源と造立の目的

板碑の起源については諸説あるが、五輪塔を基に発生したという説が有力視されている。

板碑は発生当初は木製であったが、鎌倉時代に石製に変わったと考えられている。平安時代末期の絵巻物『餓鬼草紙』に木製とみられる板碑が描かれ、これと類似した木製の板碑が石川県野々江本江寺遺跡で出土し、石製の板碑の起源になったと考えられている。

造立の目的について、仏教では生前積んだ善行と悪行によって天道・人間道・修羅道・畜生道・餓鬼道・地獄道の6つの世界（六道）があると考えられ、この六道を輪廻転生するといわ



第1図 『餓鬼草紙』に描かれた木製塔婆  
（『月刊考古学ジャーナル』第132号 昭和52年）

れている。中世の人びとはこの六道から解脱し、極楽浄土へと行くことを願っていた。

板碑には、亡くなった人を供養する「追善供養」と、自身のために生前に供養する「逆修供養」の2種類があり、死後の極楽浄土を願い板碑を造立した。

#### (4) 阿彌陀種子の板碑と題目板碑

板碑に多く見られる種子は阿彌陀一尊や阿彌陀三尊などである。

平安時代後期、貴族を中心に末法思想が広まった。末法思想とは、釈迦入滅から2000年(正法・像法の世)を経ると修行も悟りも得られなくなる末法の世が来るといわれる仏教の予言である。日本では永承7(1052)年に末法の世が来ると信じられていた。また、この時代は貴族の摂関政治から院政への転換、武士の台頭と危機感と不安が増大した時期でもある。このような社会情勢と末法の予言とが一致したことで末法思想は人びとの間で広まった。

そして現世に救いがないのであれば死後、阿彌陀仏にすがって極楽往生を遂げたいという思いが高まり、末法思想とともに浄土教が盛んになった。「南無阿彌陀仏」と念仏を一心に唱えることで極楽浄土にいけるという浄土教の教えは、多くの武士に受け入れられた。阿彌陀種子の板碑はこのような浄土教の広まりと阿彌陀信仰の影響が反映された結果である。

題目板碑は、日蓮宗で唱える題目(首題)「南無妙法蓮華經」を主尊として刻んだ板碑である。「南無妙法蓮華經」のみを刻んだ一遍首題式、首題の両脇に「多寶如来」「釈迦牟尼佛」の二尊を配した首題兩尊式(一塔兩尊式)が主なものである。四菩薩や諸天・善神を配した曼荼羅式もある。

紀年銘が残る最古の題目板碑は、東京都大田区大田区の池上大坊本行寺に正応3(1290)年在銘品である。



第2図 主な種子





## 2. 板碑研究

中世に多く造立された板碑だが、注目をされはじめたのは江戸時代中頃からである。そのころ、書家や儒学者らによって取り入れられた中国の拓本技術によって板碑の拓本が採られるようになった。寛政12(1800)年には江戸幕府三大改革の1つ寛政の改革を進めたとして著名な松平定信によって『集古十種』が編集・刊行された。その内の1篇「碑銘の部」には40基の板碑が紹介されている。

またこの頃より地誌類の刊行が盛んになり、文政13(1830)年には官撰『新編武蔵風土記稿』が刊行され、数多くの板碑が扱われた。

このように江戸時代から注目されていた板碑だが、そのほとんどは研究でなく古物への興味が中心となったものであった。

研究として板碑が扱われるようになったのは、明治22(1889)年、白井光太郎によって発表された「板碑二就イテ述フ」(『東京人類学雑誌』第35号)にはじまる。この報告のなかで「板碑」という名称について、学術用語としてはじめて用いられ、その後定着したが後に多くの問題を残した。

明治35(1902)年には、鳥居龍蔵による「板碑分布の地図を作り、聊か以つて戦国時代人民



第5図 白井光太郎



鳥居龍蔵

住居の方向を知る可し」(『日本人類学雑誌』第80号)が発表されると、やがて地方の板碑研究が盛んに行なわれるようになり『考古学雑誌』『考古界』などで報告されるようになった。

一方、鳥居は山中共古らとともに大正5(1916)年に武蔵野会を結成し、雑誌『武蔵野』を刊行した。この頃より山中共古・柴田常恵・三輪善之助・稲村坦元・服部清道らをはじめ多くの人びとによって『考古学雑誌』や『史蹟天然紀念物』などに板碑研究が報告されるようになった。

大正15(1926)年には三輪善之助による「板碑之話」(『史蹟名勝天然紀念物』)が発表され、はじめて関東型板碑を体系化した論考が示され、板碑研究は新しい段階を迎えた。

昭和8(1933)年、著名な板碑研究者、服部清道による『板碑概説』が発表された。

明治37(1904)年に生まれた服部清道(清五郎)は三輪善之助の影響で板碑研究に興味をもち、独創的な論考を発表した。

大正大学卒業後、昭和8(1933)年に29歳の若さで『板碑概説』を発表した。本文664頁を有するこの大著は、広く板碑について論及しており、発表以降、約70年にわたり板碑研究に影響を与えた。



第4図 『史蹟名勝天然紀念物』(第1集第6号)に掲載された三輪善之助による「板碑之話」

### 3. 板碑名称論

板碑の研究者として著名な稲村坦元は、明治26(1893)年、福井県大野郡大野町にて石川安兵衛の三男として生まれた。明治36(1903)年には大野町洞雲寺大洞慧全の下で出家し、その後曹洞宗大学(現 駒沢大学)にて学び、卒業後は研究生として仏教史を学んだ。

昭和3(1928)年、『埼玉県史』の編纂主事に就任し、県内各地の板碑調査を実施した。

翌年、埼玉県立図書館内に埼玉郷土会を立ち上げ、機関誌『埼玉史談』を創刊し埼玉県の郷土史研究を主導した。

戦後は、『武蔵野の青石塔婆』(埼玉県郷土文化会 昭和34年)を刊行した。

昭和6(1931)年、『埼玉史談』に発表された稲村坦元による「北埼玉郡竜興寺発見の青石塔婆に因んで板碑の呼称を排す」に端を発し、板碑の名称について論争が起こった。稲村はここで、関東型の板碑について「青石塔婆」の名称を提唱した。



第6図 (左) 服部清道 (右) 鳥居龍蔵  
東京都台東区浅草寺 西仏板碑にて



第7図 稲村坦元

さらに、「板碑名称論」(『史蹟名勝天然紀念物』昭和6年)では、板碑の本質は単なる碑文や銘記を主にしたのではなく仏教における卒塔婆を象徴するものであるとし、板碑の本質に着目した「青石塔婆」「板石塔婆」などの呼称を提唱した。

この稲村の主張に対し、昭和7(1932)年服部清道はペンネーム天野寂の名で「板碑の名称について」(『武蔵野』)を発表し、板碑は青石のみに限定されず「青石塔婆」と呼称することは不適當であると反論した。また墓標としての性格をもつ板碑もあることから、従来使用されていた「板碑」の名称でよいと論じた。

この論争はその後十分に展開されることはなく、服部清道の大著『板碑概説』の出版とともに立ち消えた。

戦後、各地で板碑が文化財として指定されるようになると一部地域では稲村が提唱した「青石塔婆」「板石塔婆」の名称が使用されていた。

昭和37(1962)年、文化財保護専門審議会にてなされた石田茂作の提案に基づき、国の指定文化財においては「板碑」の名称が用いられ、以後普及・定着した。



## 4. 立正大学における板碑研究の展開

立正大学における板碑研究は、昭和初期にまで遡り、80年を超える歴史を有している。

その端緒は、長年東京帝室博物館に勤務し、仏教考古学を体系化したことで知られる石田茂作博士（1894～1977）が、昭和初年から立正大学の非常勤講師として出講され、立正大学における考古学教育の基礎を据えられたことを契機としてもたらされた。立正大学における板碑の研究は、石田博士によって始められ、以後久保常晴博士・坂詰秀一博士に引継がれ、多くの成果を蓄積してきたのである。ここでは、紙数の関係から、石田博士と久保博士の研究を紹介し、坂詰博士については別の機会に譲ることにしよう。

### （1）石田茂作博士の板碑研究

石田博士の板碑研究の特色は、第1に板碑の概念を明確化したこと、第2に板碑の起源を碑伝に求めたこと、第3に板碑を広く仏塔研究のなかに位置づけたことにある。

まず、第1の点について、簡単に振り返っておこう。

石田博士は、1943年に発表された「我国に於ける塔形の種類と其の系統」（『夢殿』10号）のなかで、さまざまな塔形を系統立てて整理し、「板石塔婆（板碑）」を「角塔婆の輪郭を板石に表わした形をなすもので、関東地方に最も多い。上部二線の彫刻の下には角塔婆の場合の如く梵字・佛像を表わすを常とし、梵字には阿弥陀「キリク」釈迦「バク」大日「バン」等の種子が多く用いられる。遺例としては貞永三年銘武蔵東光寺のものを最古とする。此と同形式のものは関東の外に尚四国阿波、九州大分地方にもある。



第8図 石田茂作

又此の板碑を二基横に並べた形を一石に作り出したものは特に聯碑と呼ばれる」と規定し、板碑を石製品に限定した。対して、「板塔婆」は、「角塔婆の輪郭を板に現したもので、これには上部の二線の彫刻は無いのが普通である」と規定し、木製品に限定した。「角塔婆の輪郭」を表現した塔婆のうち、石製品が板碑、木製品が板塔婆であると概念規定したのである。ちなみに、「角塔婆」は、「方柱の頂を方錐形に切り、柱の上部に二線を彫刻したものを名づく」と規定している。

その後、1974年の『日本仏塔の研究』（講談社）において、板碑を「板碑」「類型板碑」「自然石板碑」の3類型に区分した。「板碑」は、「青石、即ち緑泥片岩板石の上部を三角に切り、その下に二条の切れ込みをつくり、中部に梵字または仏像を表わし、下方に年月日その他を刻したものをいう。青石以外の材で造ったのも板碑という場合もあるが、ここでは狭義に青石製のものにかぎる。従ってそれは関東並びに四国阿波地方産のもののみを意味する」と規定され、緑色片岩を素材とするものに限定された。「類



型板碑」は、「石質の相違は勿論のこと、典型的な関東・阿波板碑を真似て作られた異質のもの総ての称である」と規定され、緑色片岩以外の石材を使用したものが一括されることになった。「自然石板碑」は、「板状の自然石に仏菩薩像、または梵字・名号等を彫刻して正式板碑に代用させたものをいう」と規定され、形態に関わりなく、自然石に図像・種子・名号などを刻んだものが板碑の周辺的な存在として位置づけられることになった。

このように、石田博士の概念規定では、板碑は石製品、それも緑色片岩製のものに限定され、頁岩・安山岩・花崗岩などで製作されたものは類型板碑、自然石を用いたものは自然石板碑として別の類型に属するものとされた。当然、木製品は、板塔婆であって、板碑ではないと理解された。

次に、第2の点について、触れておこう。

石田博士は、1956年に立正大学考古学会の会誌である『銅鐸』12号に、「碑伝に就いて(上)一板碑との関係一」を掲載され、板碑起源論争に一石を投じられた。それは、板碑に額が設けられている事例が多くみられることに注目し、その形態的特色を根拠に、板碑が修験道の碑伝に起源するのではないかと考察したものである。碑伝は、切碑伝・丸木碑伝・板碑伝と発展したが、その板碑伝が板碑の源流であると主張したのである。幅広く仏教文化を研究された石田博士ならではの見解といえるが、立正大学考古学会の会誌に寄稿いただいたことは、立正大学における板碑研究にとっても僥倖なことであった。

最後に、第3の点を指摘し、石田博士の板碑研究の方向性を確認しておこう。

石田博士は、1965年に「佛塔の変遷」を『仏教史学』12巻1号に発表されたが、そのなかで、インドのストゥーパから始まる仏塔の変化を辿ったうえで、「インドのストゥーパの臭いのない

ものが日本で独創された。そういうものが二、三ある」として五輪塔・舍利塔・板碑・碑伝を挙げる。そして、板碑について、「板碑とは板石の頭部に三角に作り、額に横の刻線をつくりその下に梵字をあらわしたもので、関東地方に多い。その変形が江戸時代に専ら流行した駒形碑であるが、その板碑のものは修験道の碑伝であったようである」と説いた。つまり、板碑は、日本独自の宗教である修験道を母体として生み出されたもので、その塔形は日本独自のものであると主張したのである。その当否については、さまざまな議論があるけれども、板碑研究に与えた影響ははなはだ大きなものがあった。

## (2) 久保常晴博士の板碑研究

久保常晴博士は明治40(1907)年3月、久保常次郎氏、シノ氏の長男として北海道旭川市に生まれた。大正2(1913)年に北海道釧路市第二尋常小学校に入学し、大正9年には北海道庁立釧路中学校にて学び、卒業後釧路第四尋常小学校代用教員として勤めた。教員退職後、昭和3(1928)年4月、立正大学予科に入学、予科を修了後は文学部史学科に進んだ。その後、長年東京帝室博物館に勤務し、仏教考古学を体系化したことで知られる石田茂作博士(1894~1977)の指導を受けた。

昭和7(1932)年には本田茂一・桃井秀治朗・矢追隆家らとともに、大崎校舎(現品川キャンパス)に考古学標本室を開設し、石田茂作博士寄贈の古瓦・瓦経をはじめ数多くの考古資料が展示された。

その後、卒業論文「題目板碑を通じて見たる関東地方に於ける日蓮宗の状勢に就いて」を執筆され、昭和9(1934)年に文学部史学科を卒業された。卒業後は史学科研究室の副手・助手を勤められ、一時期大学を離れたが、昭和22(1947)年より専門



第9図 久保常晴

部講師、予科講師を経て、昭和30(1955)年に立正大学教授に就任された。昭和41(1966)年、立正大学ネパール仏教遺跡調査団団長となる。

昭和44(1969)年、学位論文『日本私年号の研究』を執筆、日本大学より博士号を授与される。またこの研究は久保の代表的な業績として現在も高く評価されている。昭和52(1977)年に立正大学を定年退職し、同年、立正大学名誉教授となる。

昭和53(1978)年12月、に亡くなる。享年72歳であった。



第10図 考古学標本室



第11図 阿育王石柱の拓本を採る久保常晴

## 考古学から仏教考古学へ

久保常晴博士（1907～1978）が、北海道の考古学から仏教考古学へ転じられた背景には、石田茂作博士の多大な影響があった。久保博士は、半生を回顧した「仏教考古学への道程」（『佛教考古学研究』ニュー・サイエンス社、1967年）のなかで、「恵まれた事には石田先生は大学では兼任の立場でありながら専任以上に教え子を自宅に呼ばれて数年間指導された。それは先生の言によればかつて島地大等・三宅米吉・高橋健自先生から教室外で指導を受けたことが今もって役立っている、と云う見解からで実に有難き極みであった」と述べている。石田博士が立正大学の考古学に与えた影響はきわめて大きなものがあったのである。

久保博士の板碑研究の特色としては、第1に板碑の名称を論じたこと、第2に題目板碑を研究したこと、第3に北海道と関東の板碑について紹介したことが挙げられる。

第1の点については、「板碑の名称」（『月刊考古学ジャーナル』第86号、1973年）が代表的な業績で、近世における板碑の名称を涉獵し、板碑という名称がいつ出現し、定着するかをあきらかにした。今日、われわれが日常的に使用している学術用語が、あくまでも歴史的な所産であることを久保博士は指摘したのである。考古学の用語の問題は、のちに坂詰博士によって発展されるが、その基礎は久保博士にあることを忘れてはならない。

第2の点については、久保博士の独壇場ともいべきもので、「下総型題目板碑考」（『立正史学』第28号、1964年）を皮切りに、以後、「題目板碑の研究」（『立正大学人文科学研究書年報』第3冊、1965年）、「宮城県の題目板碑」（『立正大学文学部論叢』第42号、1972年）、「宮



第12図 『武蔵野』（第42巻第3号 昭和38（1963）年）に掲載された 久保常晴「題目板碑」

崎県の題目板碑」（『立正大学人文科学研究書年報』第8冊、1970年）というように、地方ごとにまとめられた論文が発表された。久保博士は、いずれの論文においても、まず資料を集成し、分布や銘文を検討されたうえで、担い手や信仰の実態を研究するという手堅い手法を採用した。そのため、板碑一覧表は充実しているが、銘文を主としたものであった。久保博士の板碑研究は、金石文研究と深い関係にあり、代表作の『日本私年号の研究』（吉川弘文館、1967年）もその延長線上に位置づけられる。

第3の点については、郷里である北海道の板碑を論じた「北海道北見国網走発見の板碑に就いての私見」（『銅鐸』第1号、1932年）がもっとも古い業績であるが、約40年後に再び「北海道応永板碑は関東型である」（『月刊考古学ジャーナル』第89号、1973年）として論じており、生涯を通して関心を持続させた板碑であった。また、「城南六区の板碑」（『立正大学論叢』第1号、1942年）や「横浜市港北区新吉田町出土の板碑群」（『日本歴史考古学論叢』吉川弘文館、1976年）は南関東の板碑の調査報告であるが、とりわけ後者で板碑を群として把握する必要性を説いていることは重要な視点として評価できよう。

このように、久保博士の板碑研究は、題目板

碑を中心に据えたものであった。日蓮宗の学林から出発した立正大学としては、まことに学風にふさわしいものであったといえるが、石田博士ほどの壮大さはなかった。その反面、地道で実証的な研究が実践され、立正大学の考古学の伝統が培われたことも疑いない。久保博士の板碑研究は、立正大学の仏教考古学の出発点を飾る金字塔というにふさわしく、再評価の作業が必要であろう。

ところで、立正大学博物館に収蔵されている板碑の大部分は、久保博士によって収集されたものである。本来の所在地や収集の経緯など不明な点が多いが、題目板碑研究のなかで調査・収集された可能性が高く、今後その経緯を具体的にあらかにする作業が求められる。久保博士は、立正大学における板碑研究を発展させられただけでなく、資料としても収集されたのである。それらの板碑は、長年考古学資料室で展示に供され、考古学教育に活用されてきた。久保博士は、昭和初年から考古資料の展示に熱心で、瓦や土器などとともに、板碑を考古資料として位置づけ、学生の教育に生かしてきたのである。その意味で、立正大学博物館の板碑の大部分は、久保コレクションとしての側面を備えている。いまだ収集の詳細を解明できていないが、久保博士収集の板碑が、立正大学博物館の原点を示す博物館学的にも貴重な資料であるこ

とを、改めて確認しておきたい。

以上、石田博士と久保博士が、立正大学における板碑研究の草分けとして、大きな業績を残されたことを振り返ってみた。最後に付言すれば、石田博士も久保博士も、板碑研究を包括する仏教考古学というより大きな枠組みを学問の基本とされてきたことを忘れることはできない。現在では、板碑研究は、仏教考古学と必ずしも同義ではなくなっているが、石田博士や久保博士の時代には、板碑研究は仏教考古学研究そのものであった。仏塔としての板碑の研究こそ、板碑研究のあるべき目標であったわけであるが、今日の板碑研究はそこから大きく離れてしまったように思う。板碑の生産と流通も重要な課題ではあるが、石田博士や久保博士がめざした板碑の宗教性の解明の重要性を、改めて実感させられる。古くて新しい課題がここにある。

(時枝 務)



第 13 図 久保常晴著『仏教考古学研究』



第 14 図 常設展示 (当館 2 階)



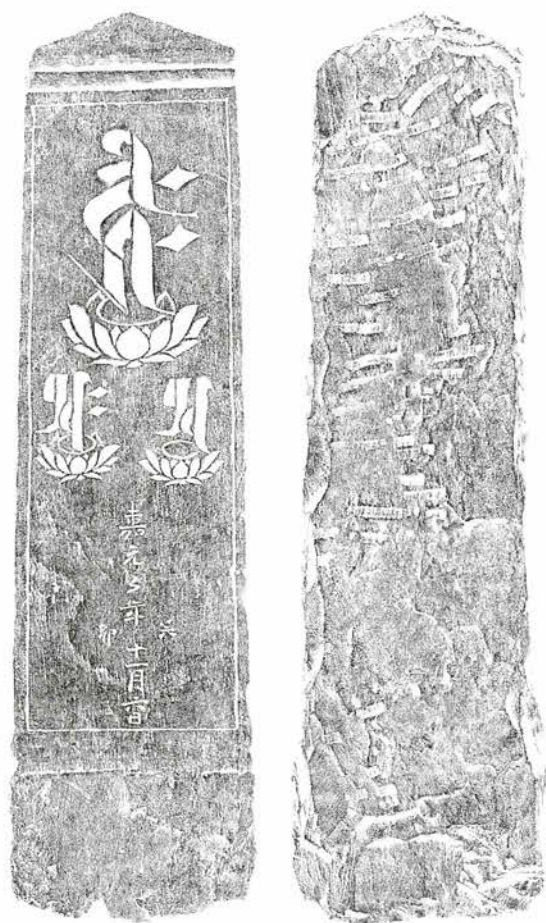
## 5. 立正大学博物館所蔵の板碑の紹介

立正大学博物館では板碑 43 基、台石 2 点を所蔵している。そのうち阿弥陀種子板碑は 18 基ある。阿弥陀種子板碑のうち、阿弥陀一尊を刻むものは 13 基、阿弥陀三尊を刻むものは 5 基ある。

### 1. 阿弥陀三尊種子板碑

紀年銘：嘉元元（1303）年

大きさ：高 121.5cm 幅 32.2cm 厚 2.8cm



三尊  
嘉元元年 十一月六日  
卯 癸

第 15 図 阿弥陀種子板碑

題目板碑は19基ある。首題両尊式は9基、一遍首題式は4基、曼荼羅式1基を含む。

天蓋を刻むものもある。天蓋とは、仏具の1つで仏像などの上にかざす笠状の装飾物である。天蓋の周りには瓔珞とよばれる玉や貴金属を紐に通してつないだ飾りである。

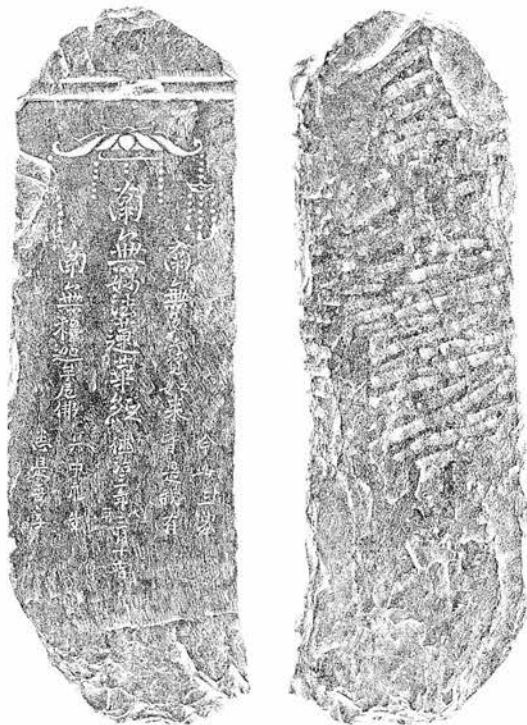
## 2. 題目（首題両尊）板碑

紀年銘：徳治3（1308）年

大きさ：高95.4cm 幅29.0cm 厚3.7cm

池上本門寺旧在

主題両尊は2世日朗の書体



(天蓋)

南無多寶如來  
南無妙法蓮華經  
南無釋迦牟尼佛  
今此三界  
皆是我有  
徳治三年戊申三月十七日  
其中衆生  
悉是我子

第16図 題目板碑

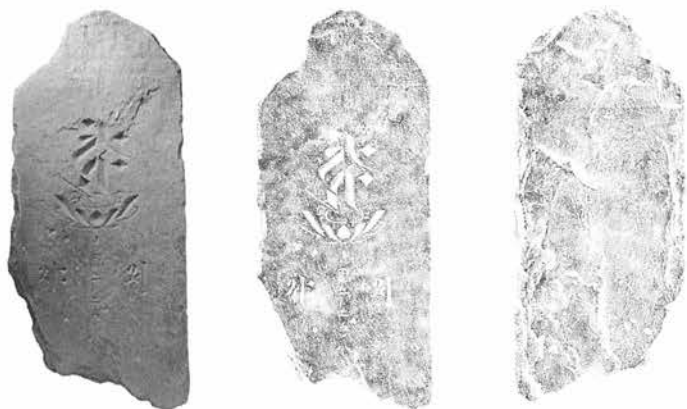
3. 阿弥陀三尊種子板碑

曆忘二(一三三九)年

高(五三.〇)cm 幅(三三.〇)cm 厚(三.〇)cm



曆忘二年八月



4. 題目(首題兩尊)板碑

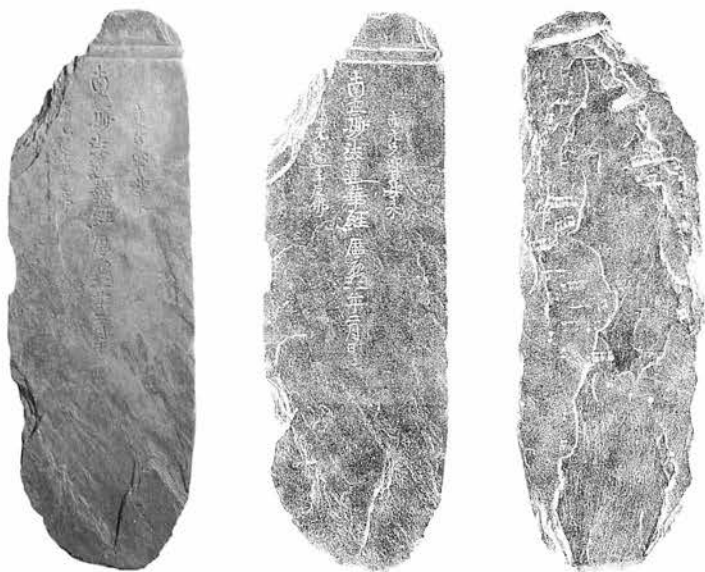
曆忘四(一三四二)年

高七三.八cm 幅二四.四cm 厚二.〇cm

南无多寶如來

南无妙法蓮華經 曆忘二年二月日

南无釋迦牟尼佛



5. 題目(首題兩尊)板碑

文和三(一三五四年)

高(三三.〇)cm 幅(三三.〇)cm 厚(一.五)cm

寶如來 逆修結衆也

法蓮華經

迦牟尼佛

文和三三年甲子閏十月日



第 17 图 所藏板碑

6. 阿弥陀一尊種子板碑

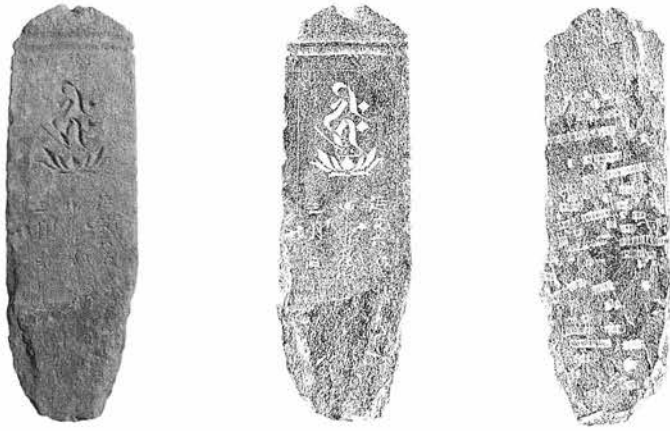
延文六(一三六一)年

高五五〇cm 幅一七〇cm 厚二五cm



延文六年

三月 日



7. 題目(一遍首題)板碑

延文六(一三六一)年

高二八〇cm 幅一八〇cm 厚一〇cm

南无妙法蓮華



延文六年



8. 題目(首題兩尊)板碑

応安六(一三七三)年

高八八〇cm 幅二八八cm 厚二五cm

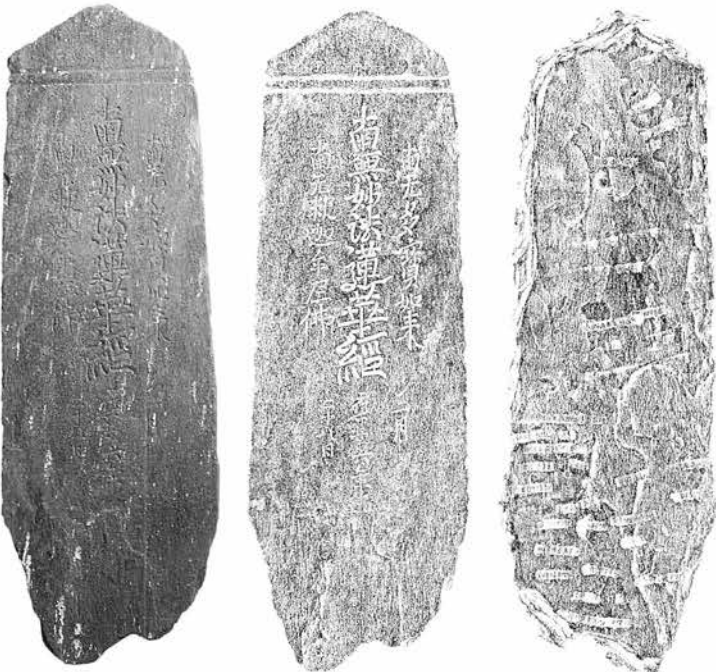
南无多寶如來

二月

南无妙法蓮華經

応安六年

南无釋迦牟尼佛 二十八日



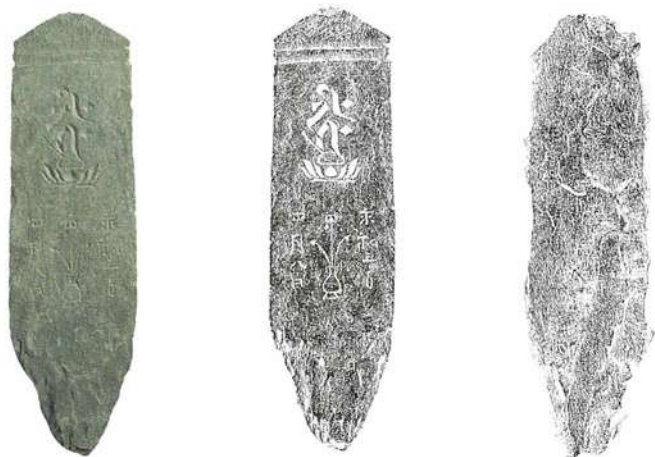
第 18 図 所蔵板碑



9. 阿弥陀一尊種子板碑

永和三年(一三七七)年

高五八.五cm 幅一六.五cm 厚三.〇cm



(花瓶)

永和三年

四月八日

10. 阿弥陀三尊種子板碑

嘉慶二年(一三八八)年

高九三.八cm 幅一九.九cm 厚二.二cm



嘉慶二年

三月

二日

第19圖 所藏板碑

1.1 阿弥陀一尊種子板碑

康曆二(三九〇)年

高(三二〇)cm 幅一五〇cm 厚二五cm



康曆二



1.2 題目(首題兩尊)板碑

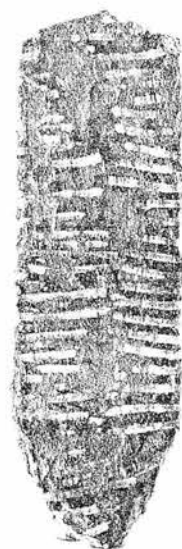
明德四(三九三)年

高一七cm 幅三二八cm 厚二七cm

南无多寶如來 明德四年

南无妙法蓮華經 妙空

南无釋迦牟尼佛 十一月廿八日



1.3 阿弥陀一尊種子板碑

忘永元(三九四)年

高八〇〇cm 幅二六〇cm 厚二五cm



(花瓶)

忘永元年

(花瓶)



第 20 図 所藏板碑

1.4 題目(首題尙尊) 板碑

應永十(一四〇三)年

高(四七〇)cm 幅(三三〇)cm 厚(三五)cm



蓮華經

忘永十年

妙忍尼

七分全

八月廿日

1.5 題目(首題尙尊) 板碑

應永三(一四一六)年

高(二二五)cm 幅(六〇)cm 厚(二九)cm



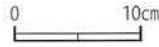
无多寶如來

忘永

法蓮華經

牟尼仏

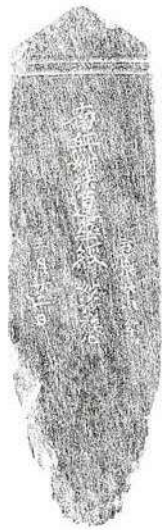
丙申九月



1.6 題目(一遍首題) 板碑

應永二八(一四二二)年

高(六八五)cm 幅(三〇四)cm 厚(二二)cm



南無妙法蓮華經

忘永廿八年

妙海禪尼

三月廿二日

第21圖 所藏板碑

17 題目(一遍首題)板碑

永享八(一四三六)年

高四一.六cm 幅二五.七cm 厚一.六cm

永享八年

南无妙法莲华经

四月九日妙法尼



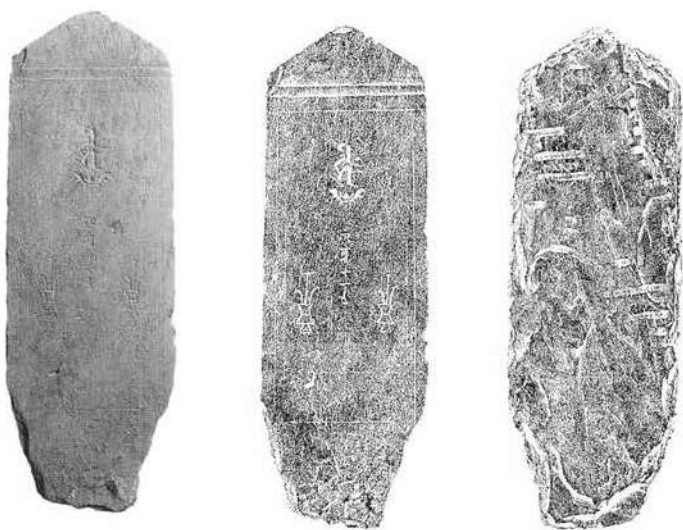
18 阿弥陀一尊種子板碑

永享二(一四三九)年

高六六.二cm 幅三二.一cm 厚二.四cm



永享十一年  
(花瓶)  
(花瓶)



19 阿弥陀一尊種子板碑

文安四(一四四七)年

高四二.〇cm 幅二七.〇cm 厚三.〇cm



逆宗賢  
文安二年時正  
丁卯  
修上座



第22図 所蔵板碑



20 阿弥陀三尊種子板碑

寬正七（一四六六）年

高（六五・五）cm 幅二五・六cm 厚三・五cm

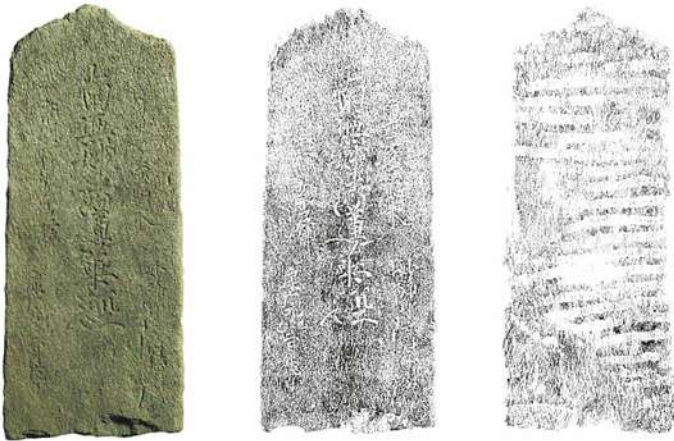


孔  
寬正七年  
妙傳禪尼遂修  
七月日

21 題目（首題兩尊）板碑

康應元（一四八九）年

高五七・六cm 幅二四・〇cm 厚二・九cm



南無多寶如來  
妙淨聖靈位  
南無妙法蓮華經  
南無釋迦牟尼佛  
康應元乙二月廿八日

22 阿弥陀三尊種子板碑斷片か

明應六（一四九七）年

高（二〇・〇）cm 幅（七・〇）cm 厚二・五cm



孔  
明應六年丁  
阿闍梨  
七月廿九日

第 23 図 所藏板碑

23 題目（曼荼羅式）板碑

文龜四（一五〇四）年

高四九・七cm 幅一六・五cm 厚一・八cm

六月壬午  
南无多寶如来  
南无妙法蓮華經  
南无釋迦牟尼佛  
大日天王  
鬼子母神  
右志者慈母妙典比丘尼  
三十三廻之為也  
文龜二年甲子三月廿七日  
白



24 題目（一遍主題）板碑

永正九（一五二〇）年

高二三・六cm 幅一五・〇cm 厚一・七cm

正九  
經 妙位  
四月五日

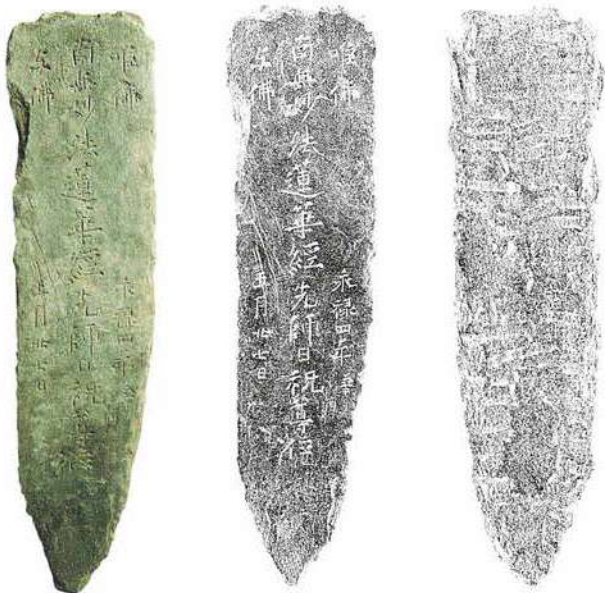


25 題目板碑

永祿四（一五六二）年

高七七・五cm 幅一九・五cm 厚三・一cm

唯佛  
南无妙法蓮華經  
先師日祝尊位  
子佛  
永祿四年 酉  
五月廿七日



第24図 所蔵板碑

[ 参考文献 ]

- ・史蹟名勝天然紀念者保存協會 『史蹟名勝天然紀念物』第1集第6号 大正15年
- ・服部清道 『板碑概説』昭和8年
- ・武蔵野文化協会 『武蔵野』第42巻 第3号 昭和38年
- ・久保常晴 『佛教考古学研究』ニューサイエンス社 昭和42年
- ・武蔵野文化協会 『武蔵野』第50巻 第3・4号 昭和46年
- ・久保常晴 「板碑の名称」『考古学ジャーナル』第86号 ニューサイエンス社 昭和48年
- ・石田茂作 『日本佛塔の研究』講談社 昭和49年
- ・石田茂作 『仏教考古学論攷』4 佛塔編 思文閣出版社 昭和52年
- ・久保常晴 『続仏教考古学研究』ニューサイエンス社 昭和52年
- ・『考古学ジャーナル』第132号 ニューサイエンス社 昭和52年
- ・埼玉県教育委員会 『板碑—埼玉県板石塔婆調査報告書—』I 本文・図版編 昭和56年
- ・坂詰秀一 『板碑の総合研究』1 総論編 柏書房 昭和58年
- ・池上 悟 「本学所蔵考古資料の整理研究」『立正大学文学部論叢』第82号 昭和60年
- ・立正大学博物館 第6回特別展 図録『題目板碑の世界』平成21年
- ・本間岳人 『池上本門寺 歴史的石造物の調査2 池上の題目板碑・中世石塔』平成26年





立正大学博物館 第12回企画展 板 碑

発行日：平成29年9月28日

編集・発行：立正大学博物館

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700

TEL：048-536-6150 / FAX：048-536-6170

Email：museum@ris.ac.jp

URL：<http://www.ris.ac.jp/museum/>